

# ことわざ用例数 100 ランキング —江戸期までと現代—

時田昌瑞

## はじめに

2020年に日本で現代常用されることわざ300を見出しとした『世界ことわざ比較辞典』を刊行し、その付録に「常用ことわざランキング100」を載せた。それまでは常用ことわざとの表現は使われていたものの、内容は数量的な裏打ちがなされておらず主観のレベルに止まるものであった。これに対して付録のリストは具体的な調査に基づいた実例を集計し、それをランキング形式にまとめたものであった。たった2ページに過ぎないものの費やした時間は少なくない。手前味噌を承知でいえば、これまで使用例数をランキング化した例はなく初めての試みであった。幸いにも一部の人が興味を示してくれた(注)。

## Ⅰ. ランキング化に到るまでの経緯

ランキングの下敷きにした資料は30数年前に遡る。切っ掛けは江戸期の有名な井原西鶴作品に表われたことわざの索引に疑問をもったことによる。それまでに西鶴作品はいくらか読んでおり、ことわざがよく使われていると感じていたので、索引に注目した。改めて索引をみるとあるはずのことわざが見当たらない例が少なからずあったので、これは自分でもやってみるしかないと思い、西鶴全集を読み、ことわざの類を拾い出す作業を開始した。この作業の結果は学会の前身に当たることわざ研究会で発表した(1988年7月)。ランキングに関係する点に限定していえば、ことわざの項目が630余、使用例総数が1,000余となった。この結果はこれまでの索引に比べ収集数が大幅に増えるものになった。

西鶴から収集できたことわざが予想外に数も多いうえ、既存のことわざ辞典に用例にも掲示されていないものがあることも判明した。また、西鶴に限らず当時のことわざ辞典では出典や用例を挙げる自体が珍しく、未掲示の項目も多くあったので、もっと広い範囲から用例を集める必要があると考え、その作業にかかることにした。収集対象の範囲としては、①歴史的にたどるもの(明治期より前のものの収集)②現代のことわざのありようの調査と収集(新聞テレビに出てくるものを主とした収集)③いろはカルタや視覚化された作品の収集と調査。この三つの領域のものを対象にした作業をほぼ同時に始めた。本稿に直接関わるものは①と②なので、以降はそれに限定した内容として論を進める。

## Ⅱ. 読んで調べた文献(明治期前を対象に)

### A) 江戸期

1) 文芸領域では『洒落本大成』、『小噺大系』などの洒落本・噺本、仮名草子、浮世草子(西鶴以降の)、浄瑠璃(竹田出雲など)、黄表紙(山東京伝など)、読本(曲亭馬琴など)、歌舞伎脚本(鶴屋南北など)、人情本(為永春水など)、滑稽本(十返舎一九、式亭三馬など)、合巻(柳亭種彦など)。

2) 短詩形では俳諧(松尾芭蕉・与謝蕪村・小林一茶など)、狂歌(大田蜀山人・宿屋飯盛など)、川柳

3) 歌謡(民謡、長唄、義太夫、小唄など)。

その他、儒学（貝原益軒・新井白石など）、国学（本居宣長・平田篤胤など）、武士道、心学（石門心学）、蘭学（杉田玄白など）、水戸学（藤田東湖など）、番付、落書。

## B) 江戸期前

憲法十七条、古事記、日本書紀から桃山時代までの資料を対象にした。利用した文献は『日本古典文学大系』『日本思想体系』（共に岩波書店）、『群書類従』『続群書類従』を主に、『高僧名著全集』（平凡社）や空海、道元の著作集などによった。

ここに属すものとしては、『万葉集』『古今和歌集』などの和歌、『源氏物語』などの王朝文学、『今昔物語』などの説話、『土佐日記』などの日記文学、『梁塵秘抄』などの今様歌謡、『徒然草』などの随筆、『平家物語』などの軍記物、舞曲である幸若舞、室町時代の短編小説である御伽草子、謡曲、狂言。

文芸以外では『大鏡』『吾妻鏡』などの歴史書。最澄・空海・源信・法然・道元・一遍・親鸞・日蓮・明恵・蓮如・一休などの僧侶による著述。家訓書（北条重時家訓など）、寺社縁起。

## III. 収集したものの概要

語句のまとめ方について。大半の語句に微妙に異なる言い回しが多数認められることから、それらはできるだけ同じ項目に集めて数えることにした。その理由は、言い回しが時代の変遷により微妙に変化する事例が多出したことによる。言い換えると、ことわざ表現の移ろいがたどれるのではないかと考えた。とはいえ、それは本稿とは別の事柄なのでこれ以上は触れない。以下が本テーマに関わる概略となる。

1. 総数：約4.5万。常用度を計測することを目的としたものなので、1～3回程度しか出てこないものは計算に入れてない。それ故、江戸期までの実際の総数は6万以上になると推算している。
1. 項目数は1890項目。ここも使用例が1～3回のものや、バリエーションは数こいれていないので、それを加えれば軽く数倍になるとみている。
1. 使用度合は100回以上のものが36点。90回台が16点。80回台22点。70回台26点。60回台40点。50回台61点。40回台106点。30回台158点。20回台266点。10回台370点。以下は省略するが、回数を表わす数字が下がる程使用回数は減少している。10回台以上は合計1101点となり、789点が10回台以下となった。
1. ○胆を（か）潰す（消す、冷やす、潰れる） ○片腹痛い ○言語道断 ○前代未聞 ○取るものも取りあえず ○傍若無人 ○埒があく（埒あかず、埒の明く、埒があかぬ、埒をあける等）はいわゆる慣用の語句と見做してランキングにはいれていない。理由は収集の段階で数量が膨大であることから、収集を途中で止めたものも少なくなく、正確な数字が表せないことによる。ただ、総数には入れられている。中途のものながら、参考までに触れると、○胆を潰すは632例以上であり、○埒があくは463以上を収集していた。
1. 100項目のうち、4分の3以上になる78項目は江戸期以前から用いられている古いことわざであった。ちなみに、上位10に入る江戸期からのものは「一寸先は闇」の1点のみであり、20位まででも「藪から棒」「善は急げ」の2点に止まった。

#### IV. 江戸期までのランキング100位まで

\* 1位から順番に示した。コロンの後ろの数字は数量。

1) 一騎当千:287 2) 一樹の陰、一河の流れも他生の縁:197 3) 夜を日に継ぐ:180 4) 風の便り:170 5) 焼け野の雉、夜の鶴:169 6) 老少不定:166 7) 子故の闇 (に迷う):146 8) 一寸先は闇:142 9) 毛を吹いて疵を求める:136

10) 悪事千里 (を走る):133 11) 九死に一生 (を得る):132 11) 藪から棒 (を出す):132 13) 壁に耳 (あり):130 14) 善は急げ:129 14) 自業自得:129 16) 柳は緑、花は紅:128 17) 神は正直の頭に宿る:125 18) 光陰矢のごとし:124 18) 門前市をなす:124

20) 後悔先に立たず:123 21) 知らぬが仏:122 22) 手を拱く:115 23) 薄氷を踏む:114 23) 水の泡:114 25) 盲亀の浮木:113 25) 馬の耳に風:113 27) 飛んで火に入る夏の虫:110 28) 上見ぬ驚:107 28) 恋の重荷:107 28) 故郷に錦を飾る:107

31) 一朝一夕:104 31) 良薬口に苦し:104 33) 貞女両夫にまみえず:103 33) 人面獣心:  
103 33) 濡れ手で粟:103 33) 隙行く駒:<sup>ひま</sup>103 37) 手の裏を返す:101 38) 雲泥の違い:  
100 39) 枯れ木に花:99 40) 神は非礼を受けず:98

41) 宝の山に入りながら手を空しく帰る:97 42) 尾羽打ち枯らす:96 43) 命あつての物種:95  
43) 同気相求む:95 45) 優曇華の花:<sup>うとんげ</sup>94 46) 鬼に金棒:93 47) 恩を仇で返す:92 47) 玉に瑕:92 49) 梅檀は双葉より芳し:<sup>せんたん</sup>91 49) 寝耳に水:91 49) 袖の振り合せも他生の縁:  
91 49) 一つ穴の狐:91 49) 瓢箪から駒 (が出る):91

54) 鶺鴒の真似する烏水を飲む:88 54) 四の五のいわぬ:88 54) 渡りに船:88 57) 笑う門には福来たる:87 58) お髭の塵をとる:86 58) 会稽の恥を雪ぐ:<sup>そそ</sup>86 58) 手の舞足の踏むところ:86

61) 氏より育ち:85 61) もっけの幸い:85 63) 虎の尾を踏む:84 63) 身から出た錆:84 65) 後の祭り:83 65) 氏なくして玉の輿:83 67) 猿猴が月:82 67) 果報は寝て待て:82 67) 思い内にあれば色外に現る:82 67) 比翼連理の語らい:82

71) 旅は道連れ:81 72) 金のなる木:80 72) 地獄の沙汰も金次第:80 72) 積善の家に余慶  
あり:80 72) 鶴は千年:80 76) かごの鳥:79 77) 後ろ指差される:78 78) 偕老同穴:

77 78) 金が敵 : 77 78) 塵積もって山となる : 77 78) 梅に鶯 : 77 78) 問はず語り : 77

83) 鬼の目にも涙 : 76 83) 蓼食う虫も好き好き : 76 83) 飛んで火に入る夏の虫 : 76 86) 寸善尺魔 : 75 86) 月夜に釜を抜く : 75 86) 屠所の羊 : 75 86) 虎伏す野辺 : 75 86) 人の行方と水の流れは知れぬ : 75

91) 雌雄を決す : 74 91) 月に村雲花に風 : 74 91) 外面菩薩内心夜叉 : 74 94) 花より団子 : 71 95) 麻につるる蓬 : 70 95) 石部金吉 : 70 95) 多勢に無勢 : 70 95) 満つれば欠くる : 70 95) 類を以て集まる : 70 100) 得手に帆を上げる : 69 100) 傾城に誠なし : 69 100) 爪に火をともし : 69 100) 労あつて功なし : 69

## V. 上位10までの語句の略解

- 1) 一騎当千 (287) : 「一人当千」ともい、両方で大半を占める。他に「いちにん当千」も15例ある。一人で千人を相手に戦う程に強いことから言う。最も古い例は最古の歴史書『日本書紀』に2件ある。様々な分野で見られるが、特に目立つのが軍記物で、最も早い例は『将門記』に見られる。これ以降は鎌倉期から『平家物語』『源平盛衰記』『太平記』『義経記』などで盛んに用いられた。さらに加えて江戸期の『南総里見八犬伝』など軍記物以外のジャンルでも多用された。
- 2) 一樹の陰、一河の流れも他生の縁 (197) : 同じ木陰で雨宿りしたり、同じ川の水を飲んだりするのも前世からの因縁とすることから、ちょっとしたことでも深い関わりがあるのだということ。ほんの僅かしか違わない言い回しがたくさんある。短いものでは「一樹の陰」、長いものには「一樹の陰に宿り、一河の流れを汲むも、皆これ他生の縁」がある。どのジャンルでも用いられている句だが、ひととき盛んなのが謡曲だ。御伽草子にもよく使われているから、室町期ころから盛んになったようだ。
- 3) 夜を日に継ぐ (180) : 昼の時間を夜につなげることから昼も夜も休まず活動すること。最古の例は『日本書紀』にある「夜を以て昼に継ぐ」。これも軍記物に多く見られるが、特に『源平盛衰記』『太平記』で多く用いられている。また、江戸期では近松門左衛門の浄瑠璃作品にも多くある。
- 4) 風の便り (170) : 何処からともなく聞こえてくる話。『古今和歌集』巻第一の春歌上にあるのが、早い例。さまざまなジャンルでよく使われていたが、江戸期以前では平安から鎌倉にかけて『後撰和歌集』『拾遺和歌集』『金葉和歌集』『新古今和歌集』などの和歌の世界とか、室町期の幸若舞曲での使用例が目立つ。
- 5) 焼け野の雉、夜の鶴 (169) : 子に対する親の情の深さをいう譬え。巢のある野原が燃えればキジは雛を助けに戻り、冬の寒い夜は鶴が自分の翼で子を覆うという故事からいう。バリエーションがいくつかあり、見出し形の他に「焼け野のきぎす」「夜の鶴」が主なもの。早い例は『和漢朗詠集』に「夜の鶴」があり、平安・鎌倉期の古いものにもいくつも見られ、『十六夜日記』『弁内侍日記』などの女流の日記文学にもある。見出し形の早い例は謡曲の『唐船』。なお、鴨長明の『発心集』には、ここの故事を記し

た箇所が記されている。江戸期では俳諧での用例が目立つ。

- 6) 老少不定 (166) : 人の命は予測できないこと。老人だから先に死に、若者だから後になるとは限らないことからいう。仏教語であることから当然であるが、法然・道元・一遍・日蓮・一休などの僧侶の著作や『宝物集』『沙石集』『撰集抄』の仏教説話集に見られる。この他にも軍記物『平家物語』『曾我物語』『義経記』『石田軍記』、江戸期では仮名草子・浄瑠璃・噺本・人情本・歌舞伎脚本などが挙がる。
- 7) 子故の闇に迷う (146) : 親が子供可愛さのあまり分別を失う事。後ろの動詞を省略した「子故の闇」とか、「子を思う闇」などとも表現された。平安時代からさまざまなジャンルで用いられている。特に目立つのが近松作品などの浄瑠璃で多用された。
- 8) 一寸先は闇 (142) : 将来のことはほんの少し先のことで分らないとの譬え。「一寸先は闇の夜」ともいわれた。江戸期以前には見当たらず、江戸初期からの用例となる。上方系のいろはカルタに採られ、なかには先のことが分らないから今を楽しめと享楽を勧める絵が描かれたものも少なからずあった。どのジャンルでも多用されたものの、特に花柳界に題材をとる洒落本での使用が目につく。
- 9) 毛を吹いて疵を求める (136) : 他人のささいな欠点をあばくことの譬え。髪の毛を吹分けて疵を探し出すことから言う。早いものが平安初期の仏教説話『日本霊異記』。日蓮・覚如・一休などの僧侶の著作にも見られる。江戸期では馬琴の『南総里見八犬伝』が群を抜いていて多く 20 例近くに及んでいる。
- 10) 悪事千里を走る (133) : 悪い行いは世間に早く広まるとの譬え。「悪事千里」と省略したり、動詞の「走る」の代わりに「駆ける」「行く」とする表現もみられた。江戸期前の用例はいくつかあるものの、殆どが江戸期に集中している。ジャンルもあまり片寄は見られないが、人情本での使用が多いようだ。

## VI. 現代の常用ことわざ 100

ここでは新聞（主要全国紙の他にスポーツ紙や週刊誌など）を主にテレビ・文学書などから使用例を収集しリスト化したものをベースに作成した。新聞は1992年10月から2015年12月31日までであり、文学書などは戦後のものに限った。総数は概算ながら3.5万となる。この中から上位の100を掲示する。コロンの後の数字は使用例数を表わす。

- 1) 一石二鳥 : 292    2) 寝耳に水 : 183    3) 三度目の正直 : 178    4) 目から鱗 (が落ちる) : 169
- 5) 太鼓判を押す : 157    6) 疑心暗鬼 : 156    7) 二足の草鞋 : 140    8) 氷山の一角 : 138    9) 背水の陣 : 136    10) 二の舞 : 129
- 11) 白羽の矢が立つ : 127    12) 目白押し : 116    13) 歯に衣させぬ : 115    13) 一匹オオカミ : 115
- 13) 鑄を削る : 115    13) 一筋縄では行かぬ : 115    17) 対岸の火事 : 111    18) 一寸先は闇 : 110
- 19) 絵に描いた餅 : 100    19) 背に腹は代えられぬ : 100
- 21) 後の祭り : 98    22) 弱肉強食 : 92    22) 火に油を注ぐ : 92    24) 他山の石 : 90    24) 棚から牡丹餅 : 90
- 24) 一朝一夕 : 90    27) 青天の霹靂 : 88    28) 二の足を踏む : 85    29) 出る杭

は打たれる : 82

30) 火中の栗を拾う : 80 30) 長いものに巻かれる : 80 30) いたちごっこ : 80 33) 十人十色 :  
79 34) 我田引水 : 78 35) 急がば回れ : 77 35) 塞翁が馬 : 77 35) 自業自得 38) 渡り  
に船 : 76 38) 両刃の剣 : 76

40) 海のものとも山のものともつかぬ : 75 41) 同じ穴の貉 : 74 42) 九死に一生 : 73 43) 喉  
から手が出る : 72 43) 八方美人 : 72 43) 高嶺の花 : 72 46) 鬼に金棒 : 71 46) 手塩にか  
ける : 71 48) 阿吽の呼吸 : 70 49) 縁の下の力持ち : 68 49) 元の木阿弥 : 68

51) 鶴の一声 : 67 51) 百聞は一見に如かず : 67 53) 瓜二つ : 66 53) 喉元過ぎれば熱さ忘れ  
る : 66 53) 二兎追う者は一兎も得ず : 66 56) 飛ぶ鳥を落とす : 64 58) 臭いものに蓋 : 63 58)  
瓢箪から駒 : 63 58) 四苦八苦 : 63

61) 薄氷を踏む : 62 61) 禍転じて福となす : 62 61) 石橋を叩いて渡る : 62 64) 雨降って地  
固まる : 61 64) 井の中の蛙 : 61 64) 大山鳴動して鼠一匹 : 61 64) 二進も三進も行かぬ : 61  
64) 泥棒捕えて縄をなう : 61 64) 雨後の筈 : 61

71) 机上の空論 : 59 71) 歴史は繰り返す : 59 73) 濡れ手で粟 : 58 73) トカゲの尻尾切り :  
58 75) 鉄は熱いうちに打て : 57 75) 風前の灯 : 57 75) 親の七光り : 57 75) 朝令暮改 :  
57 79) 宝のもち腐れ : 56

80) 無い袖は振れぬ : 55 80) 五十歩百歩 : 55 80) 沈黙は金 : 55 80) 石の上にも三年 : 55 84)  
笑う門には福来たる : 54 84) 寄らば大樹の陰 : 54 86) 四面楚歌 : 53 86) 三つ子の魂百まで :  
53 86) 千載一遇のチャンス : 53 89) 事実の小説より奇なり : 52 89) 隗より始めよ : 52 89)  
触らぬ神に祟りなし : 52 89) 立て板に水 : 52 89) 泣きつ面に蜂 : 52 89) 寝た子を起こす :  
52 89) 見ざる聞かざる言わざる : 52 89) 目には目を : 52

97) 玉石混淆 : 51 97) 取りつく島なし : 51 97) 焼け石に水 : 51 97) 羊頭狗肉 : 51 97)  
開いた口がふさがらぬ : 51 97) 勝ち馬に乗る : 51 97) 後塵を拝する : 51

## VII 江戸期までの項目と現代の項目との違いと各々の特徴

### 1. 期間に大きな差がある

江戸期までのものは「憲法十七条」『古事記』から幕末までの期間なので1000年以上に渡る。対する現

代のもののはたったの70年に過ぎない。この時間の長さの違いはことわざの言い回しに大きく影響していると見られる。江戸期までのものには、言い回しが少しだけ異なる例が便宜的に「あ行」だけに限定しても、10種以上あるものが12例、20種以上が5例もある。全体では推算ながらこの4倍にはなる。反対に定形のように固定した言い回しのもは、20回以上の用例があるものでは、○以心伝心 ○上見ぬ驚 ○鵜の目鷹の目 ○奢る者久しからず等、わずかしかない。これを言い換えると大半の語句はいくつものバリエーションを伴っているといえる。ところが、現代のものにはこうしたことは当てはまらないようだ。「ようだ」と推定の表現をしたのは、現代のものは江戸期までのものと異なり、全体を項目ごとにきちんと集計する作業の途中にある段階のため印象のレベルでしか言えないからだ。とにかく複数のバリエーションを有する語句がそれほど目立たないのだ。その理由は明確には分からないが、多分、新聞などしっかりした校正・校閲を経たものが多いことが大きな要因とみているが…。

## 2. 伝えるメディアによる違い

双方の間での大きな違いといえるのが、音声表現が含まれているかどうかだ。現代であれば、テレビなど音声で耳にするものも少なからずあるものの、明治期前は歌謡や語り物でも全てが文字を通じてでしか接することができないからだ。

また、伝える方法が木版と自筆ものや写本に限られていた時代とテレビや全国紙の大新聞では比べものにならないものがある。片や千万の単位に対して、もう一方はせいぜい千程度の単位だからだ。この意味することは、受け手の観点からすると、多数の人の手による種々多用なもの、システム化された全国的に均質なものと違いとなる。

## 3. 出自に顕著な違いが窺われる

a) 江戸期までの語句には仏典や中国の古典を除くと外国からのものは見当たらない。10位までのなかでは中国の古典や仏典に由来するものとして、○一騎当千 ○一樹の陰、一河の流れも他生の縁 ○夜を日に継ぐ ○老少不定 ○毛を吹いて疵を求める、と半数を占めている。更に20位までに広げると、○悪事千里 ○壁に耳 ○善は急げ ○自業自得 ○柳は緑、花は紅 ○光陰矢の如し ○門前に市をなす、と実に7割となる。

b) 他方、現代の方には欧米からのものとして、○一石二鳥 ○三度目の正直 ○目から鱗 ○冰山の一角 ○一匹オオカミ ○火に油を注ぐ ○火中の栗を拾う ○二兎追う者は一兎をも得ず ○大山鳴動して鼠一匹 ○机上の空論 ○歴史は繰り返す ○鉄は熱いうちに打て ○沈黙は金 ○事実は小説より奇なり ○目には目を ○勝ち馬に乗る など16点に上る。

4. 双方に共通するもの。カッコ内の数字は前が江戸期までのもので、後ろが現代の順位を示す。

○一寸先は闇 (8 ; 18) ○九死に一生 (11 ; 42) ○自業自得 (14 ; 35) ○薄氷を踏む (23 ; 61)  
 ○一朝一夕 (29 ; 24) ○濡れ手で粟 (33 ; 73) ○鬼に金棒 (45 ; 46) ○寝耳に水 (49 ; 2) ○  
 一つ穴の狐[同じ穴のムジナ] (49 ; 41) ○瓢箪から駒 (49 ; 58) ○渡りに船 (53 ; 38) ○笑う門  
 には福来たる (56 ; 84) ○後の祭り (64 ; 21)

以上の13点が一致する。但し、江戸期までの実数は103、現代は103なので共通するものは12%強

になる。

#### 5.現代のベスト10のものは江戸期までの中では何位か

1) 一石二鳥:0 2) 寝耳に水:91例で49位 3) 三度目の正直:0 ただし、「三度の神(は正直)」「とかく三度目が本」を関連のものとするれば総数は3となる。 4) 目から鱗:0 5) 太鼓判を押す:0 6) 疑心暗鬼:17例で720位以下になる。なお、19例までの集計はできている。 7) 二足のわらじ:1例 8) 氷山の一角:0 9) 背水の陣:8例 10) 二の舞:13例

なんと常用の基準とした20例に達しているものは2位の「寝耳に水」だけという驚くべき結果とあいなった。

#### 結び

二つの異なる時期の常用ことわざを較べて明らかになった第1点目は、常用されることわざが様変わりしていること。明治・大正・戦前昭和の80年間足らずのうちに約88%ものことわざの入れ変わりがあったのだ。この結果には正直おどろいた。かなり違うだろうなどは想像してはいたものの、ここまでの相違があるとは思ってもよらなかった。もちろん、これは100に限ったものとの但し書きがいる。きちんとはまとめてはおらず、個人の印象のレベルになるものの、200位程度までは見ていることから推測すれば、それ以下のものにおいても大きな違いはないのではないかと考えている。第2点目は、江戸期までのものは中国古典や仏教関連のものに由来する語句の占める割合が高く、現代のものでは欧米由来のものが占める割合が非常に高いことだろう。どちらも外国の影響を被るものであった。違いは東洋か、西洋かでしかなかった。

見方を換えていえば、時代に応じて交流する外国のものを取りこんで自国化するかのように定着させてきたのが日本のことわざの歴史の大きな断面でもあったと見做せようか。

今後の課題としては、明治から戦前までのランキングを明らかにする必要があり、これが明示できれば日本の常用ことわざの移ろいがより明らかとなると考えている。

注:ことわざを学問の調査対象とした例は少なくないが、調査のことわざ項目数が240、被験者を280人としてまとめたものが『ことわざの心理学』(柴原恭治 黎明書房 1974年)であった。だが、使用例でのランキング化はされていない。

#### 補遺

日頃、見聞きする現代のことわざには余計な解説は邪魔だろうが、明治期前の古いものには馴染みのないものも多い上、語句の出どころも種々様々なので少し説明の補足をしておきたい。

どのジャンルでも用いられているが、ジャンルや作家などによって特によく使われる語句があるので、



概略を示しておきたい。これまでのことわざ辞典での用例は文芸類に偏った傾向があり、宗教家のものはあまり取り上げられていなかったが、実際には空海・道元など多くおり、特に日蓮や一休の著作で目に付く。政治や武士の世界でも見られた。憲法十七条の第1条では「和を以て貴しとなす」と用いられ、鎌倉幕府の『御成敗式目』の第一「神社を修理し、祭祀を専らにすべき事」には、冒頭に「神は人の敬ひこよつて威を増し」とのことわざがでてくる。また、鎌倉時代の『北条重時家訓』には20を超すことわざが記されている程だ。江戸期前に多用されたジャンルとしては軍記物と説話集が挙げられる。

江戸期では、◇俳諧（○上見ぬ驚 ○花より団子）、◇仮名草子（○柳は緑花は紅 ○貞女両夫にまみえず）、◇浮世草子（○地獄の沙汰も金次第 ○焼け野の雉）、◇黄表紙（○後の祭り ○金が敵）、◇浄瑠璃（○盲亀の浮木 ○故郷へ錦を飾る）、◇狂歌集（○瓢箪から駒 ○紺屋の明後日）、◇洒落本（○傾城に誠なし ○一寸先は闇）、◇読本（○医は仁術 ○雪と墨）、◇噺本（○笑う門に福来たる ○鶴よ千年）、◇歌舞伎脚本（○善は急げ ○もっけの幸い）、◇人情本（○蛇の道は蛇 ○噂をすれば影）、落書（三系統のいろはカルタの語句）など多岐に及び、これまで知られていない事柄も少なくないが、詳細は別の機会としたい。

## プロフィール

時田昌瑞 日本ことわざ文化学会副会長

ことわざの歴史的展開やいろはカルタなどの視覚作品に関心をもち、調査・収集してきた。主な監修・著作に『もの見方が変わる！ 世界のことわざ』『たぶん一生使わない？ 異国のことわざ 111』『世界ことわざ比較辞典』『辞書から消えたことわざ』『ことわざのタマゴ』『図説ことわざ事典』『岩波いろはカルタ辞典』『岩波ことわざ辞典』等がある。